

子豚から出荷まで飼料用米を給与した豚肉生産

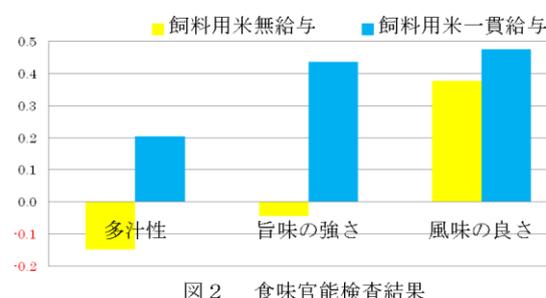
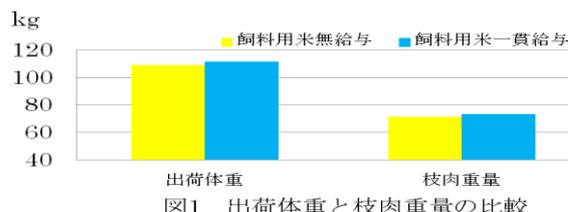
1 はじめに

福井県では、生産者の顔が見えることで安心して食べてもらえるふくいポークの生産を振興しています。今回、輸入に依存しているトウモロコシを主原料とする配合飼料の代わりに、哺育期、育成期、肥育期を通して地域で生産された飼料用米を給与する特色ある豚肉の生産技術を開発しました。また、子豚の発育を向上させるため、哺育期に乳酸発酵玄米を給与する試験も行いました。

2 哺育-育成-肥育を通じた飼料用米代替給与

哺育期（生後45日間）と育成期（生後46～110日）の飼料用米（粉碎玄米）代替率についてはH23年度の試験結果から代替率15%とし、肥育期（生後111日～）においてはH21年度の試験結果から代替率30%として、子豚から出荷まで一貫した飼料用米給与を行いました。

その結果、飼料用米無給与区に比べて飼料用米一貫給与区の増体成績に変わりはなく（図1）、肉質については、ロース芯中の脂肪含量が増え、ドリップロスが減りました。さらに官能試験では好評価が得られました（図2）。

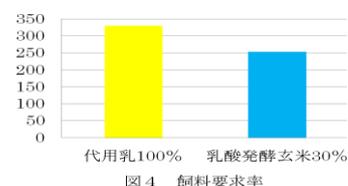


3 哺乳期における乳酸発酵玄米給与

哺乳期間（生後21日間）において、給与している代用乳の30%になるように乳酸発酵玄米^(※)を分離給与しました。

その結果、代用乳だけの区に比べて乳酸発酵玄米を給与した区の方が1日当たりの増体量（DG）が高く、また、体重1kg増体させるために必要な飼料の量（飼料要求率）も良い成績になりました。（図3、図4）

※乳酸発酵玄米の作り方については、手引きを参考にするか試験場へお問い合わせください。



4 技術の効果およびコスト

飼料用米を長期にわたり給与することで肉質が改善され、美味しさの評価も高まります。また、約7%の飼料費削減が見込まれます（図5）。

